

服をめぐる

衣服の研究現場より

一人一品
京焼作家
杉田眞龍



I4

TAKE FREE

KCI 公益財団法人 京都服飾文化研究財団 広報誌

2019.11

服をめぐる 14

一人一品

京焼作家×KCI収蔵品

杉田眞龍 p4

KCI Wunderkammer

パイナップル型バッグ p12

地産街道に行く⑩

「後編」京都金糸 p14

今日の補修室 第14回

欠損部の製作補充② p20

KCI 活動紹介

ファッション用語の手話をつくりました！ p22

お知らせ p24

本誌について

『服をめぐる』は、京都服飾文化研究財団(KCI)が収蔵する膨大な西洋服飾コレクションを手がかりに、服飾の歴史や文化を分かりやすくお伝えする小冊子です。文学者やアーティストからの視点、日本の伝統産業との関わり、研究現場からのレポートなど、さまざまな観点から服飾の世界にアプローチします。服をめぐる旅が今、ここから始まります。

京都服飾文化研究財団(KCI)とは

京都服飾文化研究財団(The Kyoto Costume Institute, 略称 KCI)は、西洋の服飾やそれにかかわる文献資料を収集・保存し、調査・研究する機関として、1978年に株式会社ワコールの出捐によって設立されました。現在、18世紀から現代までの衣装など服飾資料を約13,000点、文献資料を約20,000点収蔵。それらを多角的に調査・研究し、その結果を国内外での展覧会(「モードのジャポニスム」展、「身体」展、「FUTURE BEAUTY: 日本ファッションの30年」展など)や、研究誌(『DRESSSTUDY』、『Fashion Talks...』)の発行を通じて公開しています。Website <https://www.kci.or.jp/>



ドレス・コード?—着る人たちのゲーム展(2019年8月9日-10月14日 京都国立近代美術館) ©京都服飾文化研究財団、福永一夫撮影

表紙の収蔵品



ウエストコート

1790年代 フランス製
京都服飾文化研究財団所蔵、成田舞撮影(表紙、上)

本品は18世紀末の上流階級の男性が着用したウエストコート。アイボリーの絹ファイユ製。前身頃には多色の絹撚糸によって葡萄の収穫を題材にした愛らしい刺繍が施されている。樽に乗った奏者の音楽に合わせて楽しげに踊る人々、道端にしゃがみこんで作業をする女性。その隣では男がロバに曳かせた樽に収穫したての葡萄を詰め込んでいる。実りの季節を謳歌する牧歌的なデザインである。このような絵画的表現は18世紀末のウエストコートに度々みられ、前中心を開けたジャケットからのぞく本品のような装飾がお洒落のポイントとなっていた。なお本品は後世に縫製が解かれ、後ろ身頃は欠損している。

一人一品

京焼作家 × K C I 収蔵品

Maryu Sugita

杉田眞龍

著名人が各々の目を通し、K C Iの収蔵品に迫る「一人一品」。
今回のゲストは京焼作家の杉田眞龍さんです。

杉田さんは京都市生まれ。京都五条坂にある清閑寺窯の四代目、杉田祥平氏の長女として、幼いころから京焼に親しんでこられました。京都芸術短期大学の日本画本科・専攻科で学ばれた後、京都府立陶工高等技術専門校の図案科を卒業。さらに京都市工業試験場を修了され、1999年に清閑寺窯へ入り、祖父の三代目祥平氏、父の四代目祥平氏に師事されました。2014年には京焼伝統工芸士に認定され、国内外で幅広く活躍されています。

杉田さんの作品は、京焼の特徴である色絵や金彩を基礎とし、ゆったりと柔らかい線に立体的な絵付けをほどこすことで、生き生きとした輝きが溢れているのが魅力です。2019年4月、日本橋三越本店にて開催された「清閑寺窯 杉田眞龍 茶陶展 《色絵の旅の記憶》」では、伝統的な図案に留まらず、エッフェル塔やモン・サンミッシェル修道院（フランス）など、旅先で出会った風景を茶碗に表現した作品を発表し、大きな反響を呼びました。

今回、杉田さんにはK C I収蔵品から18世紀の衣装を二点選んでいただき、それらからイメージをふくらませた茶碗を二碗、作陶いただきました。京焼と西洋衣装のコラボレーション。一体どのような作品が出来上がったのでしょうか。





「生地
の文様を
お茶碗の
デザインに
するのは
初めて
なんです」

墨で直接下絵を描き、和絵の具で彩色をほどこしていく。白っぽい和絵の具は焼成後にビビッドな色合いに変化し、下絵の墨は消えてしまう。

乳鉢に入った和絵の具。5色を基本とし、銅やマンガンを加え調合することで、微妙な色合いを出すことができる。杉田さんの場合、約15色を使い分けている。



「デザインをするにあたり、
始めからキツチリと決めてしまおうと
面白いものにならないんです」



杉田さんが選んだ収蔵品

スーツ (アビ・ア・ラ・フランセーズ)

1790年頃 フランス製
京都服飾文化研究財団所蔵 広川泰士撮影



ドレス (ローブ・ア・ラ・フランセーズ)

1770年代後半 (素材1750~60年代) フランス製
京都服飾文化研究財団所蔵 広川泰士撮影



18世紀末の上流階級の男性が着装したジャケット、ウエストコート、パンツの三つ揃い。フランスでアビ・ア・ラ・フランセーズと呼ばれた。いずれもストライプ柄の高価な絹織物を使用されており、その上に花や麦の穂が金糸やシーキン、ガラス製模造宝石で細かく刺繍された贅沢な逸品。



ローブ・ア・ラ・フランセーズとは、当時のフランスで最も格式高い衣装形式の一つ。色とりどりの花束と花びらの柄が織り出された絹製の豪華な生地は、西欧で最高級のもので生産していたフランス・リヨン製のもの。何種類もの絹糸を使い分けて緻密な柄が表現されている。

「手を抜かずに楽しんでやる。
そしたら火の神様が
味方してくれるんです」



絵付けをほどこす杉田さん。マット金の場合
は猫の毛、和絵の具の
場合はイタチなど、さ
まざまな材質の陶器用
筆を使い分けている。



京焼の特徴である金彩用
の金泥づくり。金粉をニ
カワで溶いて使用する。
溶きすぎると輝きを失う
ため、手で感触を確かめ
ながら溶いていく。

「(衣装の)配色の美しさに、
うち独特の金の使い方を
足していきました」



京焼特有の円筒形電気釜
「錦窯」。祖父の時代から
使用し続けている。彩色
後に行う焼成は、京焼で
は通常3回。杉田さんは
理想とする色味を出すた
めに、4回以上の焼成を
行うことも珍しくない。

二度目の焼成後の状態。3回目の彩色までは同色を重ね、厚みをつける
「盛り上げ」という作業。4回目以降は色のグラデーションをほどこす作
業となっていく。最後に金を差す「金焼き」をして完成する。

完成



完成



銘

「アビ・ア・ラ・フランセーズ」

こちらは7回の焼成をしました。男性服だけれども、装飾の一つ一つがかわいらしくて。衣装に使われているシークインや金糸、ガラス製模造宝石などを、お茶碗に描き分けていく中で、18世紀ヨーロッパの職人さんと時空を超えた対話をしているような気がしました。(杉田)



銘

「ローブ・ア・ラ・フランセーズ」

ドレスにたくさんさんの色が使われているのを見るだけで、発見がたくさんありました。色のグラデーションをお茶碗に写し取ることが楽しくて、理想の色を出すために6回の焼成を重ねました。かわいらしいと思いますが、男性にも使ってもらいたいですね。(杉田)





パイナップル型バッグ

素材：絹、ビーズ
 原産地：イギリス
 製作年：1800年代初頭

手のひらに収まるほどの小さなパイナップル。ころんとしていて愛らしい。これは糸で編まれたバッグで、当時こうした小さいものは貴婦人のお洒落アイテムのひとつだった。それにしてもなぜパイナップル？ この頃のファッション・リーダーといえばナポレオンの妻、ジョセフィーン・ド・ボアルネ。彼女がカリブ海域のマルティニク島出身だったことから、熱帯の異国情緒を感じさせるものがファッションに取り入れられ、流行していたのだった。とくに南国にしかないフルーツは珍重された。そのモチーフをバッグに取り入れるにあたって、発注主はこう言ったのかもしれない。「刺繍やプリントじゃ物足りない！ そのままの形が欲しいの！」（筒井）

ドレス
 1803年頃
 京都服飾文化研究財団所蔵
 小暮徹撮影



珍品奇品も数多いKCIの収蔵庫——そこはまさに「驚異の部屋」。

「後編」 京都 金糸



バスルという下着を用いてスカートの後ろを大きく膨らませた1870年代半ばの典型的なドレス。ドレスのシルエットの変化が著しかった19世紀後半において、1870年代から80年代にかけて流行したのがバスル・スタイルと呼ばれるこの形だった

今回の手がかりとなる収蔵品

ドレス

1870年代半ば
ブランド：ターナー
レーベル：MISSSES TURNER COURT DRESS
MAKERS 151, SLOANE STREET LONDON
京都服飾文化研究財団所蔵
リチャード・ホートン撮影

- (上) ドレスの部分。「駒縫（こまぬい）」という金糸刺繍が施されている。生地 directly 刺し通せない太い糸を用いる場合、生地の上に糸を置き、別の細い糸で綴じ付けていく技法／リチャード・ホートン撮影
- (下) 京都の寺島保太良商店の織細で柔らかな金糸。世界各地に見られる金糸の多くは合金を薄く延ばして燃ったもの、もしくは延ばした合金を芯糸に巻き付けたものが多いが、日本の金糸には和紙と金箔を使用する工程がある

静かな輝き——日本の金糸

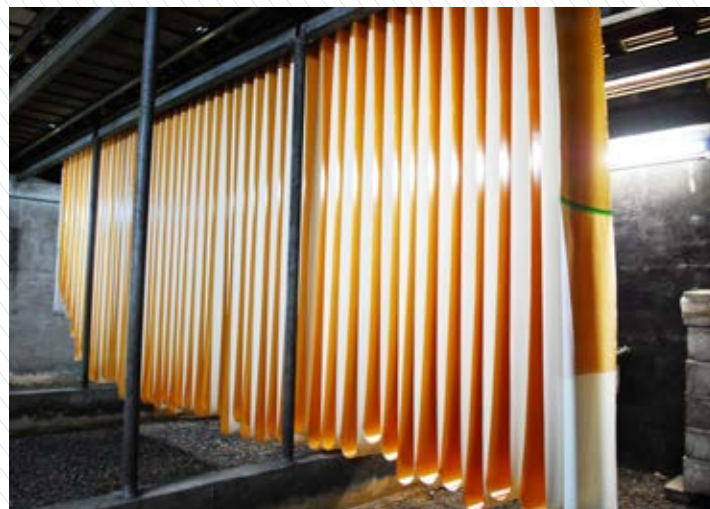
「日本の金糸刺繍は豪華だけど、けつして華美すぎない美しさがありませんね。」1870年代半ばに制作されたドレスを前にして、アメリカのある美術館の学芸員が私にそう語った。KCIが所蔵するそのドレスは、当時、ロンドンのターナーという店が仕立てたものだが、生地には日本から西欧へ渡ったきものを解いたものが使用されている。白い綸子の絹地に施された華やかな菊、牡丹、藤、団扇…。これらを形成する材料は、色とりどりの絹糸や染料、そして金糸だ。東洋の染織を専門とする彼女によると、日本の金糸は他の地域にはない繊細な輝きがあるのだという。たしかに世界各地の金糸と比べると、同じ鉱石鉱物から出来ているにもかかわらず、日本のそれには色味や輝きに落ち着きがあるように見える。

そこでこの謎に迫るべく、昔ながらの金糸の製法を受け継ぐ産地を訪ねてみることにした。すでに本誌前号の「前編」では製造工程の前半を紹介しているが、工程があまりにも複雑だったため、金という素材が登場する前に筆をおくことになった。この「後編」では前回の内容を簡単に振り返りつつ、金糸完成までたどり着きたい。





大石さんが扱う金箔は98%前後が純金。柔らかい純金に強度をもたせるため僅かに純銀と純銅が添加されている



(上) 乾燥させるため室内に吊るした漆塗布後の125メートルの和紙
(右) 漆の硬さを調整し、機械に通した和紙に慎重に塗布する服部さん



*前編はこちらでご覧頂けます。

<https://www.kci.or.jp/publication/>

和紙と漆——金糸の土台

2019年5月、金糸製造・販売業を営む寺島保太郎商店(京都市北区)の寺島大悟さんに案内頂き、最初に訪れたのは京都市南部、城陽市の市街地にある工場だった。そこでは一枚の長く茶色い「紙」が生みだされていた。「幅60センチ、長さ125メートルの和紙に漆を三度塗り重ねてこの工程は完成です。次の工程で金箔を貼るための台紙なんですよ。」職人の服部さんがそういつて、硬さを調節した漆を和紙に塗布していく様子を見せてくれた。まずロール状の和紙を機械にセツトする。そして漆を均等に塗布しながら一定の速度ではき出されてくる和紙を二人がかりで床下の深い室に波状に垂らしていく。粘度のある漆は乾かすのに丸一日かかるが、その際は僅かな風も厳禁だ。表面が一点でもどこかにくっ付いてしまうと、その1ロールは使い物にならないらしい。「金箔は1万分の3ミリですから、糸にするためにはこういう土台が必要なんですけど、凹凸があつてはいけませんね。だから和紙の表面をツルツとさせて金箔をなじませるには漆が最適なんです。」素地にこのような秘められた工程があつたとは。驚きと興奮が冷めやらぬまま、次に寺島さんに連れて頂いたのはいよいよ金が登場する現場だった。

箔押し——輝きをまとう和紙

先の工場から車で10分ほどのところに大石さんの自宅兼工房がある。大石さんはここで50年近くも「箔押し」に従事されてきたという。「うちがオーダーする125メートルの和紙ですと、11.5cm四方の金箔を5800枚貼ることになります。」と寺島さん。気の遠くなるような枚数だ。おもむろに大石さんの手が動き始めた。まず接着剤としての漆を薄くすり込んだ後、フワフワと揺れる極薄の金箔を竹ばさみでつまみあげ、迷いなく和紙のうえに置いていく。縦に5枚。補助線がないのに測つたように真つ直ぐに並んでいる。時折、微風やちよつとした揺れで金箔がクシャツとよれることがある。すると大石さんは、手のひらに乗せた紙の上でトントンと軽く振動を与えてシワのない平らな状態にもどす。まるで生き物を手なずけるかのようだ。「単純そうな仕事に見えるかもしれませんが、習得するまでに五年以上はかかります。すぐにシワになつてしまう金箔を扱えるようになるまでには根気が要りますよ。」こうした繊細な作業は125メートル分を終えるまで4〜5日間続くという。酷暑の時期も無風のなか寡黙に箔押しに勤しむ大石さんの姿を想像しながら、この工房を後にした。



(上) 寺島保太良商店がプロデュースするアクセサリ「tabane」。金糸の束がそのまま活かされている

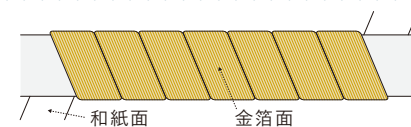
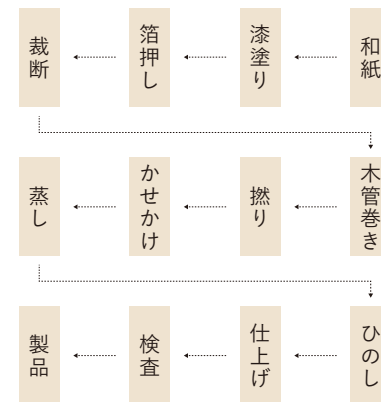
(左) 寺島保太良商店、代表取締役の寺島さん。京都市北区にあるお店の近くには、金閣寺や大徳寺といった京都の名所がある



(上) 和紙面が外側に出ないように注意を払いながら燃糸の機械を調整する太田さん

(右) 丸燃りによる金糸の図解。芯糸に平箔を隙間なく包むように燃っていく

本金糸の主な製造工程



燃糸——いよいよ糸の形へ

城陽市は西に木津川、東に丘陵地があり、常に高温湿度であるため漆を扱うには最適の場所だったこと、さらに主な消費地である京都西陣に近いことから、江戸時代後期に金糸製造が盛んになったとされる。漆和紙の製造、箔押し、裁断、燃糸にいたる金糸の一環製造が出来た地域は、今では城陽市をおいてほかにない。次に訪れた燃糸工場も城陽市の産業を支える重要な製造所のひとつだ。

近鉄京都線の富野駅にほど近い太田さんの工場では、極細に裁断した金箔紙を芯糸に巻き付けていく撚り工程を行っている。かつて手作業だった裁断や撚りは、職人の減少のため約10年前よりほとんど機械が担うようになった。しかし機械といえども人が操るには至難の業であるという。金箔面が常に外側になるよう芯糸にムラなく燃っていくかなければならない。「芯糸は様々な素材を使います。細い金糸にしたい場合は絹糸ですし、中くらいはレーヨン、太いものは綿糸を使うことが多いですね。」芯糸の種類によっても撚る速度や強さも変える必要がある。そして金箔紙が撚られ、ようやく金糸の製品として世に送られるまでには、まだ「蒸し」「ひのし(乾燥)」「検査」等の工程が待っているのだ。

「技の結晶」を未来へ

寺島さんのお店で製品になった金糸を見せてもらった。太さや色味の違う束それぞれに上品で繊細な輝きが満ちている。手に取るとしつとりと柔らかい。それは幾つもの地道な工程を経て作り上げられた「技の結晶」だったのだ。「扱いやすさや色味の豊富さを求めて、わざわざ海外からもお客さんがいらつしやいます。」と寺島さん。ただ国内需要についていえば、きもの産業の落ち込みもあり、減少傾向だという。そこで寺島さんは「金糸は織物や刺繍向け」という常識を打ち破り、新たな商品開発へと乗り出した。「五年ほど前から金糸の束を使ったアクセサリ類を作り始めたんですよ。」見ると金糸の素材がそのまま活かされた現代的なネックレスやブレスレットが品よく輝いていた。

今度あの学芸員が日本に来たら、このアクセサリと一緒に見に来よう。きつと上品な金糸の美しさに感嘆するに違いない。そして、古くから続く製造の秘密を語って聞かせたいと思う。

取材文・筒井直子

寺島保太良商店

〒603-1824 京都市北区紫野西泉堂町65-2

電話 075-4951711
ホームページ <http://www.terajima.com>

今日の補修室

TODAY'S RESTORATION ROOM

第14回

欠損部の製作補充②



ただ今、ブレード(組紐)
を製作中です!

今号は、1775年頃に製作されたドレス(ローブ・ア・ラ・フランセーズ)の欠損部分を補充した事例をご紹介します。

このドレスは、ローブの前中心部分に見事な装飾が施されています。しかし、左身頃の装飾部分がネックラインの少し下から30cm近く欠損していました。前号で記した欠損部の製作補充を行う二つの条件(欠損によって衣服の機能やデザインが著しく損われていること、現存している部分をもとに欠損前の状態を推量できること)を満たしていたため、2009年に京都国立近代美術館で開催した「ラグジュアリー：ファッションの欲望」展に出展するにあたり、本品の欠損部を補充することになりました。

まず、土台となる生地(組紐)の製作からとりかかりました。オリジナルの土台の生地は、2色の経糸によるストライプ柄のシルクサテンに、浮いた緯糸で水玉が織り出されています。これらの柄をKCIで製作できる染色と刺繍で表現することになりました。まず市販のシルクサテンをオリジナルと同じ色味のストライプに染め上げました。その上に、浮いた緯糸で織り出されていた水玉に似せて、水玉を刺繍していきました。

次にブレード(幅の狭い組紐のこと)の製作に取りかかりました。オリジナルのブレードはコード・糸・モールの3種類でできていました。これらと近い素材が使われているブレードを市販のものから探し出し、ほどいて必要な糸類を取り出し、それぞれ染色しました。これとようやく素材の準備が整いました。これらの材料で装飾を作り上げる工程は次回ご紹介していきましょう。(次号につづく)(伊藤ゆか)

ドレス (ローブ・ア・ラ・フランセーズ)

1775年頃 フランス製
京都服飾文化研究財団所蔵
広川泰士撮影

(上)ブレード製作に使う糸は、オリジナルに色を近付けるために何度も染色を試した。



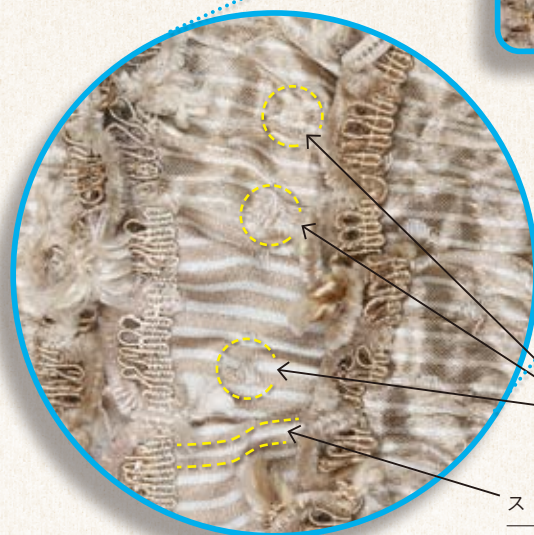
(左) 試作段階の生地。ストライプに染めた後、水玉を刺繍した。

(右) ストライプに染めるための型紙。



拡大

さらに拡大



製作補充した部分

水玉柄の刺繍

ストライプ染め



⑥

2時間かけて手話が完成！それぞれのグループが手話を発表し、意見交換をしました。



⑤

書き出したキーワードのなかから最終的に必要と思うものを皆で選び、その特徴を手話の「ふり」にしていきます。

完成した手話

トレンチコート



① 衿を立てる動作

人差し指と中指をたて、首元で手のひら側を外にクルッとひっくり返します。



② ベルトを結わえる動作

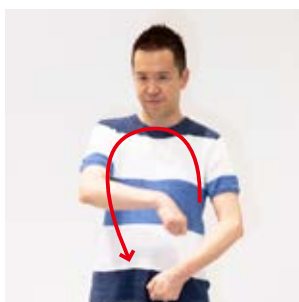
ウエストの左前でグーをつくり、両手を小さく回します。



③ ベルトの端を下にひく動作

両手のグーを「ハ」の字に下げます。

ライダーズジャケット



① ジャケットを勢いよく羽織る動作

グーにした右手で、胸の前で左から右へ円を描きます。



② ジャケットを身体にぴったり添わせる動作

両手をウエストの中央で強く握ります。



③ ファスナーをしめる動作

右手をウエスト部分から胸元まで引き上げます。

展覧会ワークショップ報告

ファッション用語の手話をつくりました！



日 時 2019年9月16日(月・祝)
午後1時30分～4時
場 所 京都国立近代美術館1階講堂
参加者 聞こえない人、聞こえる人、計19名
企画協力 NPO法人エイブル・アート・ジャパン
「美術と手話プロジェクト」

「手話とアート それってどんな服？」
～sign language dress up～」

今 夏、京都国立近代美術館で開催した「ドレス・コード？」展では会期中にさまざまな関連イベントを実施しました。そのなかのひとつ、ワークショップ「手話とアート それってどんな服？」sign language dress up～」では展覧会出展アイテムである「ライダーズジャケット」と「トレンチコート」を取り上げ、それぞれの語を表す手話を制作しました。



②

各アイテムの写真をみながら、各自が抱くイメージをキーワードで書き出しました。「ライダーズジャケット」は「不良」「男っぽい」「硬い」など、「トレンチコート」は「探偵」「就活」「かっちりしている」など…。



①

参加者は聞こえない人が10名、聞こえる人が9名。「ライダーズジャケット」と「トレンチコート」の2グループにまんべんなく分かれて制作開始！



④

「ドレス・コード？」展会場で、各アイテムのディテールやバリエーションを鑑賞しました。皆さん、ファッション・デザイナーが生み出す面白い発想に興味津々。



③

実際のアイテムを触ったり着たりしてイメージを膨らませ、さらにキーワードを書き出しました。着心地や見た目のイメージ、細部の装飾に関する言葉も数多く出ました。

「ドレス・コード?—着る人たちのゲーム」展 熊本に巡回

KCI収蔵品を中心に、アートや映画、マンガなどに表現されたファッションを視野に入れながら、現代社会における〈ドレス・コード〉とわたしたちの装いを見つめ直す「ドレス・コード?—着る人たちのゲーム」展。今年8月から10月にかけて京都国立近代美術館で開催し、好評を博した同展が、この冬、熊本市現代美術館へ。どうぞ期待ください。



「ドレス・コード?—着る人たちのゲーム」展

会場 熊本市現代美術館

会期 2019年12月8日(日)～2020年2月23日(日)

※詳細は展覧会特設サイトをご覧ください。<https://www.kci.or.jp/dc/>



「ドレス・コード?—着る人たちのゲーム」展 京都展 会場風景 (©京都服飾文化研究財団 福永一夫撮影)

服をめぐる

「服をめぐる」衣服の研究現場より 第14号
2019年11月29日発行(年3回発行)

-

発行：公益財団法人 京都服飾文化研究財団 (KCI)
〒600-8864 京都府京都市下京区七条御所ノ内南町103
株式会社ワコール京都ビル内
電話：075-321-9221

ウェブサイト：<https://www.kci.or.jp/>

編集：筒井直子、福嶋英城、松坂雅子(京都服飾文化研究財団)
デザイン：坂田佐武郎、桶川真由子(Neki inc.)

写真：成田舞(Neki inc.)

筒井直子、福嶋英城(京都服飾文化研究財団)

編集後記

2019年はKCIにとって大型展覧会の開催年でした。ニューアーク美術館を皮切りに、サンフランシスコ、シンシナティの米国三都市を巡回した「Kimono Refashioned」展。そして夏に京都国立近代美術館で幕を開けた「ドレス・コード?」展は、今冬、熊本市現代美術館へ巡回します。国内外の多くの皆さまにKCIの収蔵品をご覧頂けることが私たちの大きな喜びであり、活動の糧となっています。2020年もどうぞ期待ください！